

教育改善プロジェクト報告**留学を視野に入れたクラスの在り方の検討**

山岸倫子, 水野真理子, 木村裕三

令和4年度より開始した英語新カリキュラムにおいて、留学を視野に入れたクラスの設置は大きな命題であり、本クラスと一年次学生60名を対象とした海外語学研修プログラムは、強く連動する形で新カリキュラムが構築された。しかし、新カリキュラムが始動する前後において、この大前提が揺らぐ状況となった。本報告では、留学クラス設置に関するこれまでの経緯と、留学クラスに実際に配属された学生像を追い、今後の留学クラスの在り方について検討する。

1. はじめに

日本の大学生の海外留学数は、2018年度まで増加の一途を辿っており、2018年度には、その数は115,146人に達した¹。2018年度以降は、コロナの影響から大幅な減少となったが、2018年度までの傾向を鑑みるに、コロナ禍が明けた際には、海外留学数は再び上昇に転じることが予想される。

富山大学においても、齋藤滋学長による「Saito Vision 2021」の教育分野の項目に、「英語教育の充実、海外語学研修等によるグローバル人材の養成」が掲げられており、教養教育における英語科目も、このビジョンの実現の一助となるよう、新カリキュラム（令和4年度開始）について、議論を重ねてきた。本報告は、その議論を振り返りながら、令和4年度前期の留学クラスにおける学生像の一端を報告する。

2. 教養英語における留学クラスと一年次学生対象海外語学研修プログラムの連動性の模索

2019年度より、学長主導のもと、1年生60名を対象とした海外語学研修プログラム（以下「海外語学研修プログラム」とする）の検討が始まった。これを受けて、外国語部会英語分科会教養英語カリキュラム検討WG（以下、カリキュラム検討WG）は、令和4年度からの新カリキュラムと、このプログラムをどのように連動させるかを検討することとなった。当初は、すでに試験的に実施していた「上級クラス」²のような、希望する学生が自ら選択して履修するクラスを設置し、留学に興味関心のある学生を集めて、上述の海外語学研修プログラムに向けて、留学時に資する英語力を鍛えることが検討されていた。しかし、2019年度後期および2020年度後期に実施された「上級クラス」でも、留学希望者は、それぞれ22名、26名しか存在しなかった。このことから、2022年次4月の前期から、

留学を希望する学生 60 名を募集するのは困難であることが予想された³。また、カリキュラム検討 WG 外からの意見として、留学に関心があったとしても、英語力が伴わない場合、そういった学生を本海外語学研修プログラムの参加者に加えることについての懸念が呈された。こういったこと受け、カリキュラム検討 WG では、何度も議論を重ねたうえで、「超上級」と位置付けられるクラス（五福文系 1 クラス、杉谷混成 3 クラスの計 4 クラス）の設置を決定していた。（共通テストのスコアで配属を決定するため、留学を望まない学生も本クラスに含まれることを考慮し、クラス名に「留学」を冠することを避けた。）

しかし、2021 年 11 月に、執行部から、より「留学」という側面を打ち出すことが要請されたため、「超上級クラス」（4 クラス）を「留学クラス」と名称変更し、位置づけを「留学しても通用するレベルの英語力を育てるクラス」とすることとなった。また、「留学クラス」で鍛えた学生を海外語学研修プログラムに連れていくという路線をより強く打ち出すことが必要であるという、カリキュラム検討 WG 外からの意見を受け、ある程度の学生数を「留学クラス」に確保しておく必要性にも対応することとなった。それは、本海外語学研修プログラムに対する大学からの経済的支援が、渡航費用の全額補助ではなかったため、留学クラスに属している学生であっても、語学研修プログラムへの参加を希望しないケースが生じることが予想されたからである。また、カリキュラム検討 WG 内の議論において、すべての学部の学生に応募の機会を与える必要性が指摘されたことから、もともと「留学クラス」として予定されていた 4 クラスに加え、その下に設置されているいくつかの「上級クラス」のうち、最上位のクラス（五福文系・理系・杉谷混成からそれぞれ 1 クラス）及び、芸術文化学部の学生で構成される「上・中級」（芸文）クラス（1 クラス）の計 4 クラスを、海外語学研修プログラムに優先的に応募できるクラスとする案が検討された。そして、これら 8 クラス（「留学クラス」4、「上級クラス」のうち最上位クラス 3、「上・中級クラス」1）を対象に海外語学研修プログラムの一次募集を行い、応募者数が 60 名に満たなかった場合のみ、上記の対象クラス以外の通常クラスにも応募の機会を広げることとなった。また 2022 年 3 月初旬には、より適切なクラス名称を再考し、その結果、これらのクラスは「Study Abroad 1」および「Study Abroad 2」という名称とすることに決定した。そして、クラスの定義を「〔実際に留学するしないにかかわらず〕留学にも耐えうるレベルの英語力を身につけることを目標とする」と定めた。

3. 学生選抜方法における方向転換と 2022 年度前学期の様子

このように、教養英語カリキュラム運営側では、「留学クラス」は海外語学研修プログラムと大きく連動する形で議論が行われていたが、国際機構側でも本プログラム募集・実施に向けての議論は重ねられ、2022 年 3 月末に議論の一応の区切りを見た。それは、国際機構が企画責任母体として、本研修プログラムの企画が明確になった時点で、1 年生全員に一斉に情報を周知し、募集をかけるというものであった。この決定には、留学クラス以外の学生でも、留学マインドのある学生を選定したいという、国際機構の希望があった。この方向性は、カリキュラム検討 WG が一番初めに検討していた案を支える考え方と親和性が高く、結果的には本節後半に記述される形に落ちついたものの、本研修プロ

グラムと新カリキュラムの連動については、教養教育院と国際機構との連携の視点からも、カリキュラム検討 WG では相当の時間を割いて検討してきた。このため、振り返ってみたときに、国際機構関係者である第三執筆者の、情報提供者としての役割をより明確化しておくべきであったかもしれない。また、カリキュラム検討 WG の方としても、実施母体である国際機構との意思疎通を、より意識的かつ頻回に行っておくべきであった。しかしこの行き違いが生じた最も大きな要因としては、本研修プログラムの趣旨についての情報が二転三転し、プログラムの実施母体ではないカリキュラム検討 WG はもちろんのこと、実施母体である国際機構関係者にとってすら、実態の把握が困難であったことがあると言えるだろう。

新カリキュラム開始直前になって上記の変更が行われることになり、海外語学研修プログラムと教養英語は、直接的な関係がなくなったが、学生への周知については協力体制を維持していくこととなった。その一つの試みとして、国際機構から Study Abroad クラスへの多面的な留学情報提供を行うため、英語分科会の方で Moodle コースを立ち上げることとなった。4 月下旬に当該コース（2022_情報提供_StudyAbroad クラス向け留学情報）の整備が終了し、富山大学における留学制度や、留学に必要な英語資格についての情報提供の場とした。2022 年度前期中においては、本コースを通じて、国際機構の吉川教員から留学に関する情報が発信され、Study Abroad クラスの学生たちの留学マインド育成が試みられた。また、2022 年 9 月上旬に、国際機構が作成した海外語学研修プログラムの概要ポスターが教養英語科目担当教員に配付されたため、後期の各授業で本プログラムの参加者募集についてのアナウンスを行う予定となっている。

4. 令和 4 年度前学期における Study Abroad クラスの学生像

本報告執筆者の山岸は、2022 年度前期に Study Abroad 1 および Study Abroad 2 クラスの基盤英語 I の授業を担当した。上述の通り、Study Abroad クラスと海外語学研修プログラムは直接的関係がなくなったわけであるが、一般的な留学マインドを育む契機になればと、各授業の 1 コマ 90 分を使用し、留学についての情報を提供する授業を行った。それらの授業において実施したアンケートから垣間見えた、Study Abroad クラスの学生像の一端を紹介しておきたい。

山岸が担当したのは、五福文系の Study Abroad 1 および Study Abroad 2 の 2 クラスであり、留学について情報提供を行ったのは第 8 週目の授業であった。内容は、留学の種類を紹介、語学留学にかかる費用、教員自身が経験した長期留学の写真を交えた体験談、留学費用の工面方法、留学に必要な英語の資格等についてであり、授業の開始時と終了後に、留学についての各学生の思いについてのアンケートを実施した。授業開始時に行ったアンケートにおいて、Study Abroad 1 と Study Abroad 2 では、Study Abroad 1 クラスの方が、海外留学に「とても興味がある」と答えた学生数が多かったが、「とても興味がある」「少し興味がある」と答えた学生の総数にそれほど大きな差はなかった。一方、Study Abroad クラスに配属されながら、留学に「あまり興味がない」「全く興味がない」と回答した学生が半数弱いることは、本クラスの在り方を考えていくうえで重要であるように思われた（図 1）。また、海外留学に興味がある理由や目的には、異なる文化への興味や、英語力向上が多く挙げられており（図

2)、一方で、興味がわからない理由として、語学力や金銭面に対する不安や、自身の興味と関連しないことなどが挙げられていた(図3)。

また、授業後に行ったアンケートでは、教員の実体験を交えた留学についての情報が役に立った、留学への興味がわいた、という意見も多かったが、一方で、留学の必要性をやはり感じない、金銭面で難しい、英語力に不安を感じる、といった理由から、留学への興味が喚起されなかった学生もいた。今後、Study Abroad のクラス運営を検討するにあたって、留学色を強めて、英語力の高い学生に留学マインドを育てることに注力していくべきなのか、それとも、現在の Study Abroad クラスには留学に関心のない学生が半数近く存在することを考えると、Study Abroad クラスの選抜方法など、カリキュラム上の Study Abroad クラスの在り方自体を検討していくべきなのか、考えさせられる。特に、本クラスが8クラス設置されたのは、海外語学研修プログラムへの応募者数を確保するためであったが、本クラスとプログラムの直接的関係がなくなった今、Study Abroad のクラス数を8つという大規模にする必要性がないのではないかと、ということも考えられる。教養英語カリキュラムにおける Study Abroad クラスの在り方については、引き続き検討を行っていきたい。

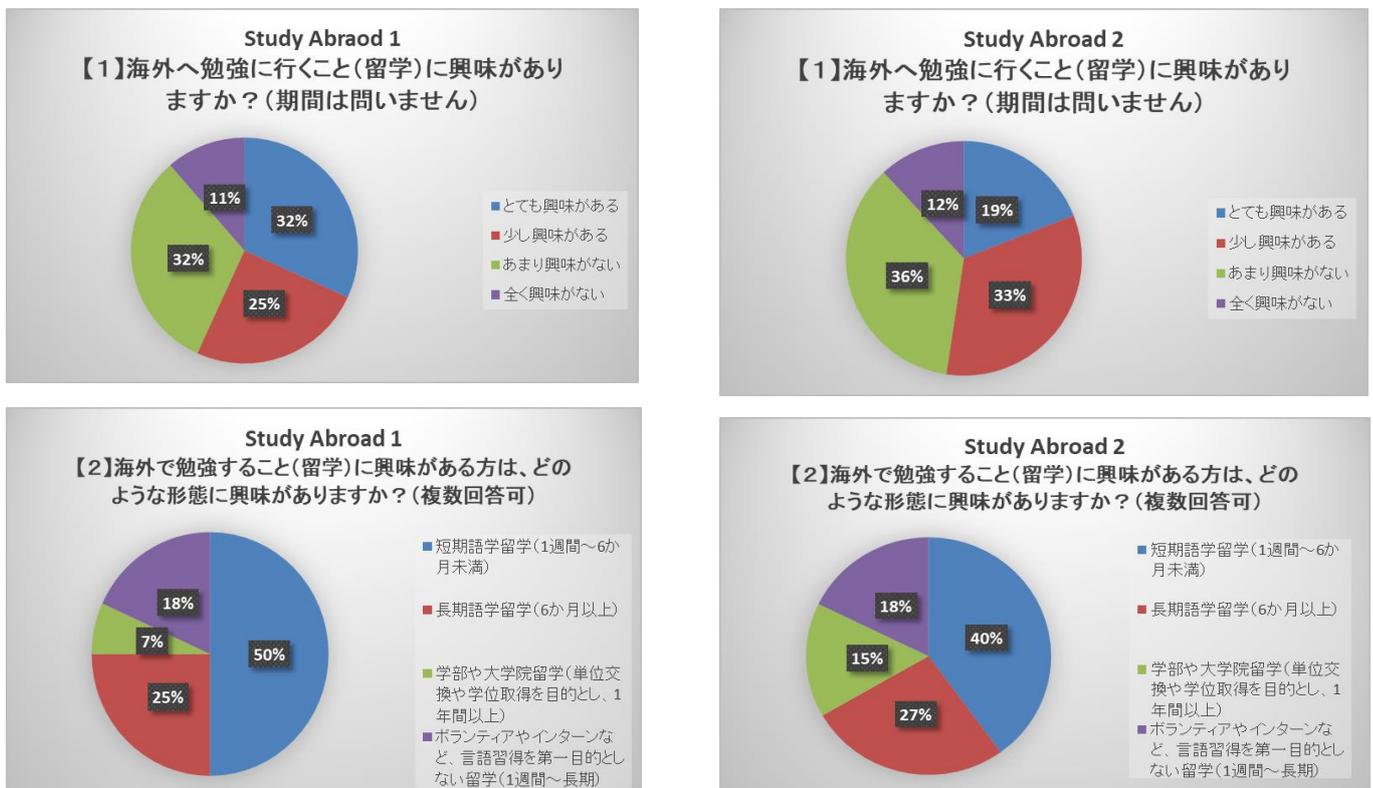


図 1. Study Abroad 1 および Study Abroad 2 の学生における海外留学への興味

留学を視野に入れたクラスの在り方の検討

<p>【3】海外で勉強することに興味がある方は、その理由や目的を教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ NBA を見に行きたい ➢ 海外の文化に触れてみたいから。 ➢ 言語を学んだからには実践してみたいから。 ➢ 海外の人と交流して、お互いの文化などについて理解を深めてみたいから ➢ 日本語が周りにない環境で生活するという経験をしてみたい。ラフな日常会話ができるようになりたい。 ➢ 海外の雰囲気を味わってみたいから。 ➢ 異文化を体験したり語学力を向上させたりしたいから。 ➢ 日本では経験できないような体験や、価値観との触れ合いがしたいため。そして何より高2で一週間アメリカ留学に行った際楽しかったから。 ➢ 新しい環境に行ってみたい。 ➢ 学んだ英語でどれだけコミュニケーションが取れるのか知りたいから。 ➢ 日本以外の国での生活を経験してみたいから。 ➢ 日本国内の人だけではなく、多くの人や文化に触れ、考え方を広げたいから。 ➢ 海外での英語を学んでみたいから。 ➢ 他文化に触れてみたいから。 ➢ 英語の教員を目指すうえで貴重な経験になると思うから ➢ この先の世の中を生きていくうえで必要不可欠なものとなると思うから ➢ 日本語に触れずに英語だけで生活する機会を得られるから。 ➢ 本物の英語に触れる機会は貴重で、自分の英語力向上に役立つから。 ➢ 海外での授業に興味があるから。 ➢ 高校の頃に留学が中止となっしまい、そのリベンジをしたいから。 ➢ 高校生の時に留学する機会があったが、コロナの影響で行けなくなってしまっってからずっと行きたいと思っているから。また海外での生活に憧れがあるから。 ➢ 将来英語教員を目指す身として、実践的な英語も習得しておきたいから。 ➢ 海外の生活に触れてみたいから。 ➢ 外国語しか話せない環境に身を置くことで語学力が身に付きそうだから。 ➢ 海外の文化を実際に見てみたい。 ➢ 日常的にネイティブな英語に触れてみたいから。 ➢ 自分が体験したことのない世界や文化を実際に体験するため ➢ 外国語の能力を向上させて将来海外の人とも働けるようになるため 	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 英語を習得するためにネイティブに混じって生活してみたいから。日本だと英語を聞くこと、話す機会などが限られているけど海外に行けばたくさん英語を聞けるし話せるから。 ➢ 海外に行ってみてみたいから。本場の英語を聞いて英語の能力を培いたいから。 ➢ 楽しそう ➢ 楽しそうだから ➢ 海外の文化などを学びたいから。 ➢ 現地の英語に触れ、少しでも英語を話せるようになりたい ➢ 直接海外の文化に触れてみたいから。 ➢ 自分の英語能力を向上させたいから。 ➢ 実際に現地の人と会話することで英語を話す力がつくと思うから。 ➢ 海外での生活を体験してみたいから。 ➢ 英語を上達させたいから。 ➢ 自分の専攻が海外で学んだほうが得るものが大きいときには留学してもいいのではないかなと思っています。 ➢ 現地の英語に触れてみたいから。 ➢ 日本の中だけではなく海外にでることで、自分の価値観考え方を広げたいから。 ➢ また、昔から海外にあこがれがあるから。 ➢ いろんな経験をしてみたいから。 ➢ 実際に英語を日常で使わないと伸びないと思うから。 ➢ 高校の時に英語のみで外国の人々と三日間交流する機会があり、英語力ももちろんけどとても自分の視野が広がったと感じたから。 ➢ ネイティブの英語に触れて英語を上達させたいから。 ➢ 日本と異なる言語、文化、環境に行って学びたいと思うから。 ➢ 様々な価値観を持った方と話すのがとても楽しいから。 ➢ 色々な文化に触れてみたいと思うから。 ➢ 語学力を高めたいから。 ➢ 海外でしか経験できないことがあると思うから。 ➢ 就活等で活かせると思うから。 ➢ 外国語を話せるようになりたいのはもちろん、使いながら授業を受けられるようになりたい。 ➢ 実際の英語に触れて、自身の語学能力を試すとともに、能力を上達させたいから。 ➢ 語学力を高めたいし、また国際支援の活動をして世界のこともっと学びたいから。 ➢ 自分の暮らす場所とは違う、他の地域の文化に触れてみたいとは思っています。 ➢ 外国語の習熟度や日本と違う環境への不安は大きいですが、生まれ育った日本から一度出て、自分の糧となる経験を得たいから。
--	--

図2. 留学に興味があると回答した学生から寄せられた、理由や目的の自由記述

【4】海外で勉強することに興味がない方は、その理由を教えてください。

- 今後、海外に行くつもりがないから。
- 海外へ行くのはお金がかかる上に、安全とは言えないから。
- 海外にまで行って、英語を勉強する必要はないと考えるから。
- 外国語に自信がない。
- 国外に行くことに抵抗がある。
- 純粋に興味がない。
- 海外に留学することの自分へのメリットがいまいちわからないし、そもそも海外で自分の英語が通用する自信がないから。
- 今、海外で勉強することに意義や必要性を感じないから。
- 海外で勉強したいと思うことがないから。
- 海外に行って英語をさらに勉強したいわけではないから。
- 共通テストの英語が得意だっただけであって、自分自身の中では英語はそれほど好きではないし、海外に留学した時に自分の英語が通用するか、不安が残るから。
- うまく英語を話せる自信がないから。
- 海外こわい
- 経済的な理由やコロナ禍に中であり行きたいと思わない
- 金銭面で不可能だから
- 他にやりたいことがたくさんあるから。
- 海外はこわいし、英語の上達にそこまで興味がないから。
- 語学を専攻したいわけではないから。海外に行って自分の英語が通用する自信がないから。
- 語学自体にあまり興味がないから。
- 現時点で魅力を感じていないから。
- リスニングやスピーキングが苦手で、海外に行っても得られるものが少ないと思うから。
- お金がかかる
- お金がかかるから
- 難しそう
- お金がかかる
- 現状で海外に行ってまで勉強したいと思っていないから。
- 自分の英語力で海外に行ってもいいのかと考えてしまうから。
- 金銭的理由
- 海外は日本より治安が悪いイメージがあるので怖いから
- 将来の夢と関係がないため。
- 海外での生活が自分にはしんどいと思うから。
- 外国語に自信がなく、コミュニケーションに不安があるから。
- 日本語以外でのコミュニケーションに自信がない。
- 特に海外に行ってやりたいこともない。
- 海外の方と話してみたい気持ちもあるのですが海外に行くことに

少し抵抗があります。

- 特に留学してまで学びたいことは現状ないからです
- 人付き合いができないわけではないが、苦手だからメリットがよくわからない
- 毎月の通院をどうすればいいのかわからない
- 外国に興味がないわけではないし、アンティークなどが好きなので行ってみたい気持ちはあるが、現地の英語についていける自信がないから。
- 海外で生活できる自信がないから。英語は興味あるけど、コミュニケーションをとれる自信がない。
- 日本で生きてれば事足りるから。
- 留学についての情報をあまり知らないから
- 留学よりも旅行で行きたいから
- 興味のあることと海外留学することがあまり関係しないと思うから

図3. 留学に興味がないと回答した学生から寄せられた、理由の自由記述

註

1. 「データでみる日本の留学」. <https://tobitate.mext.go.jp/about/case/>
2. 「上級クラス」の詳細については次を参照。「英語習熟度別クラス編成に向けて：上級、基礎力拡充クラスの実施」. 水野真理子他. 『富山大学教養教育院紀要』3号. pp. 82-88.
3. 結果的には、2022年度において58名の参加希望者が集まった。20名がマレーシア（トウシク・アブドゥル・ラーマン大学）、38名がフィリピン（アテネオ・デ・マニラ大学）に渡航予定である。

山岸倫子

教養教育院

水野真理子

教養教育院

木村裕三

医学部